

主の記念



主の記念

約3600年前、イスラエルの民は過越の小羊の血を取り、家の戸口に塗るよう命じられました。その後、家の中に入り、その夜をそこで過ごすようにと。イスラエル人に与えられた指示は明快で、従うことは容易でした。

私たちにも同じことが起こりました。イエスを個人的な贖い主として受け入れ、象徴的に心の戸口に血を塗ったのです。これが私たちの旅の始まりでした。

。

過越の夜

その夜、過越の小羊が屠られ、血が家の戸口に塗られた後、イスラエル人は家の中に入り戸を閉めた。彼らは焼かれた過越の小羊を食し、この営みにおいて家族として一つとなった。

彼らは、福音の時代のこの夜に、神の小羊によって引き寄せられ、血のもとに小羊を食し、その犠牲の功績を自らに帰する兄弟たちの姿を表していた。私たちは詩篇133篇を想起する。「見よ、兄弟が共に住むことは、なんと良きこと、なんと喜ばしいことか！」（詩篇133:1）。

イスラエルの民は、その夜、家族ごとに聖なる、喜びに満ちた、平和な交わりの中で集められた。

この儀式の最も重要な部分は、家の戸口に血を塗ることでした。これは血による救いを表しており、す

べてのキリスト教生活の基盤です。「ご自身のからだで私たちの罪を十字架に負われた」（ペテロの手紙一

2:24）イエスこそ、私たちを贖うために血を流された過越の小羊なのです。（ペテロの手紙一

1:19）。イエスは「罪を知らない方でありながら、私たちのために罪とされた。それは、私たちが神にあって義と認められるためである」（コリント人への手紙二 5:21）。

（コリント人への第二の手紙5:21）。イエスは地上におられた間、特に苦しむ者、貧しい者、盲人、不具者、らい病人に心を配られました。人生の立場に関わらず、全人類が身代金の恵みの受益者です。小羊の血は、私たちと神、そして互いとの結びつきを可能にします。イエスは一致の中心です。

集まる必要性

イエスは言われた。「二人または三人が、わたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる。」

（マタイ18:20）。私たちは聖霊によって集められ、キリストこそが集会の理由です。このような集まりは聖さによって特徴づけられます。聖霊は私たちをキリストのもとにのみ集めることができます。聖霊は名や儀式や制度や団体に集めることはできませんが、天に栄光を受けたキリストのもとにのみ集めるのです。集められているのは「小さな群れ」です。

イエスは言われた。「もしだれでもわたしを愛する

主の記念

ならば、わたしの言葉を守るであろう」（ルカ12:32、ヨハネ14:23）。イエスと神への愛の証しは、御言葉で命じられたことを行うことにある。神に献身しキリストに従う者は、もはや自分の意志を行おうとしてはならない。それは神が私たちの中で行っておられる御業を妨げるからである。

最初の過越の夜、イスラエルのすべての家族が家に集まった時、彼らは火で焼かれた子羊の周りに集まった。出エジプト記12章8節、9節の指示は極めて明確である：「その夜、彼らは火で焼いた肉と、種入れぬパンと、苦菜とを共に食べなければならない。生で食べてはならない。水で煮てもいけない。火で焼いて食べなさい。頭も足も、内臓もすべて焼いて食べなさい。」

焼かれた子羊は、真の過越の子羊であるイエスが、御自身の奉仕の三と半年の間、「火のような試練」という火の作用に自らを委ねられた様子を象徴している。この象徴は非常に重要であったため、イスラエルには生で食べたり水で煮たりして食べてはならないと命じられたのである。

パン種を取り除く

過越の小羊を食べるための指示は、より偉大な過越の小羊である私たちも同様に適用されます。イスラエル人はそれを種入れぬパンと共に食べるべきでした。酵母は悪と罪の象徴です。神の言葉において、それが純粋、聖なる、あるいは善なるものを象徴するために用いられることは決してありません。過越祭と併せてイスラエルが守るべき祭りは「無酵

パンの祭り」と呼ばれた。出エジプト記12章15節が命じたように：「七日間、無酵パンを食べなければならない。初日には、家から酵母を取り除かなければならない」。

これはイスラエルが罪から分離することを示すためであった。使徒パウロはこう告げている。「だから、古いパン種を完全に除き去りなさい」（コリント人への第一の手紙5:7）。パウロは「古いパン種を除き去ろうと努めなさい」とは言っていない。むしろ彼は断定的に「そうしなさい」と命じている。私たちの肉は、このような計画を妨げるかもしれない。使徒はこれを認識し、こう記している。「私は正しいことをしたいのに、できない。善を行いたいのに、行わない。悪いことをしたくないのに、それでもしてしまう。

しかし、私が望まないことを行うとき、それは私自身が行っているのではなく、私の中に住む罪が行っているのです。こうして私はこの法則に気づきます。善を行いたいと願う私の中に、悪が共にあるのです」（ローマ7:19-21）。それでもなお、私たちはあらゆる努力を尽くして罪と悪を取り除くべきです。

イスラエルはこれを七日間行うべきであった。七は完全さを表す。クリスチャンは悪を捨て去り、聖なる生活を送るべきである。神は思い、言葉、行いにおける悪を決して許されない。使徒ヨハネが神についてこう警告するように、「もし私たちが神との交わりがあると言いながら、暗闇

の中を歩むなら、私たちは偽りを言い、真理を実践していないのです」（ヨハネの手紙一 1:6）。彼は後にこうも述べている。

「もし私たちが罪がないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにはありません」（ヨハネの手紙一

1:8）。肉は絶えず主張を続けるが、神の助けの恵みによって私たちはそれを抑え込むことができる。ヨハネは続ける。「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方なので、私たちの罪を赦し、すべての不義から私たちを清めてくださいます」（ヨハネの手紙一 1:9）。

しばしば私たちは不意を突かれ、誤った言動をしてしまうことがある。そのような時こそ、ヨハネがこう戒めるように、直ちに弁護者を求めねばならない。「これらのことをあなたがたに書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないためである。もしだれでも罪を犯したなら、私たちは父のもとに弁護者、義なるイエス・キリストがおられる。」（ヨハネの手紙一 2:1）

新たに育まれている心は完全さを求めています。しかし個々のクリスチャンは、完全な新しい体を受けるまでは完全にはなれません。ヨハネが言うように、「神から生まれた者は罪を犯さないことを、私たちは知っています」（ヨハネの手紙一

5:18）。ヨハネは、神から生まれた者は故意に罪を犯さないと教えています。彼らは罪に同調しません。古いパン種を洗い流すのです。

過越の小羊を食べること

イスラエルの民は無酵母パンを食べたことで救われたのではなく、過越の小羊の血によって救われた。同様に、クリスチャンも実践的な聖さによって救われるのではなく、イエスの血によって救われる。しかし、悪や罪を实践や原則として続ける者は、イエスとの真の交わりを持たず、その救いを楽しむこともできない。

身代金の恵みを受け、神の集会に属する者は聖くあるべきだが、その救いが恵みによるものであり、自らの聖さによるものではないことを認識すべきである。

苦い野菜

過越の小羊は苦い野菜と共に食べられた。これらは、焼かれた小羊に象徴されるイエスの経験に関連する、主の民の苦い経験を表している。「もし私たちが（彼と共に）苦しむなら、また彼と共に支配するであろう」（テモテへの第二の手紙2:12）。「私たちは多くの苦難を通して神の王国に入らなければならない」（使徒言行録14:22）。イエスについてこう預言されている。「彼は私たちの背きのゆえに傷つけられ、私たちの咎のゆえに打ち砕かれた。私たちの平和の懲らしめは彼の上にあった」（イザヤ書53:5）。

（使徒14:22）。イエスについてこう預言されている。「彼は我らの背きのゆえに刺し通され、我らの咎のゆえに砕かれた。我らの平和の懲らしめは彼の上にあった。彼の打ち傷によって我らはいやされた

」(イザヤ53:5)。我々は自らの聖さによって癒されるのではない。

使徒パウロは幕屋の犠牲について語り、こう告げている。「それゆえ、イエスも、ご自身の血によって民を聖別するために、

門の外で苦しまれた。だから、私たちは、彼の恥を背負って、陣営の外に出て、彼のもとに行こう。」

(ヘブル13:12,13)。こうして、私たちは試練と苦難という苦い草と共に、焼かれた子羊を食べなければならない。

神の助けにより、私たちは自分の肉を十字架につけることができる(ガラテヤ5:24)。使徒パウロのように、私たちは自分の体を鍛えようとしている(コリント第一9:27)。これは「よくやった、良い忠実な僕よ」という言葉を聞くために必要なことである(マタイ25:21)。

イスラエルが子羊を食べた時、彼らは旅の準備が整った。エジプトを去る準備ができたのだ。二度とエジプト人と交わることはなかった。杖を手に、急いで食べるべきだった。

これらすべては、キリストの将来の王国における共同相続人としての私たちの未来の運命によって特徴づけられるべき私たちの生活を象徴している。杖は私たちの依存、旅における神への頼りを象徴していた。これらすべては小羊の血によって可能にされた。神がキリストを通して私たちを一致させてくださったように、神は約束の地、天のカナンへの旅路においても私たちを導いてくださる。

「わたしを覚えて」

世の慣習では、英雄や偉人の誕生日は記念されるが、彼らの死の時や状況は概して忘れ去られる。おそらく主な理由は、彼らを偉大たらしめる業績が生前に限られるのに対し、死は彼らの生涯に終止符を打つからだろう。しかしイエスにおいては、この順序が逆転している。

確かに、彼の誕生は毎年何百万もの人々によって好意的に記憶されているが、彼の具体的な指示は、弟子たちが彼の死を記念すべきというものだった。彼は自身の誕生を祝うことについての指示を残さなかった。

墮落した人類の救い主となるためには、イエスが人間としてこの世に生まれることが不可欠であったのは当然だが、贖いをもたらしたのは彼の死であった。主の最初の降臨の主目的は、その死によって達成された。

その生涯は人々を奮い立たせ、教えは人間の行動に広範な影響を与え、奇跡は恩恵を受けた者たちにとって祝福の賜物となり、預言は時代の重要な出来事の多くを正確に予見した。しかし、死という事実がなければ、この地上での使命はほとんど無駄に終わっていただろう。他のすべての人間の業績は死によって断ち切られたが、主の奉仕は死によって最大の効果を発揮したのである。

これこそが、神の民がイエスの死を記念することを神が望まれる理由に違いない。イエスの死の必要性と、それゆえにのみ私たちが今、彼を通していのち

の

な希望を享受する特権を与えられるという事実を、常に心に留めておくことが極めて重要である。私たちが主の弟子として彼の死を覚えることが重要なのは、聖書が私たちに彼と共に死ぬよう招いているからである。

イエスと同様に、クリスチャンたちの奉仕も、死に至るまで忠実に犠牲の務めを全うしたときにのみ、勝利をもって完成されるのである。黙示録2:10

重大な日々

イエスの地上での生涯の最後の数日間は、重大な日々であった。次々と起こる出来事の意味をイエスは理解していたが、弟子たちはその意味をほとんど理解できなかった。イスラエルは、ユダヤで全時代の最も重要な歴史が今まさに作られているという事実を全く見失っていた。あの劇的な日々の中で、イエスはエルサレムの城門を通り抜け、イスラエルに自らを彼らの予言された王でありメシアとして示されたのである。

その後、彼は神殿から両替商たちを追い出した。弟子たちはオリブ山で彼に問いかけ、彼の再臨と世の終わりのしるしについて尋ねた（マタイ24:2,3）

。彼は上階の部屋で弟子たちと過越の食事を共にした。ユダは彼を敵の邪悪な手に売り渡す取引をした

。ゲッセマネの園での苦悩に満ちた場面、続く裏切り、大祭司による審問、ペテロの否認、ピラトとヘロデによる裁判、鞭打ち、嘲笑、そしてついに十字架刑。これらは人類の

最も高貴な恩人である彼の最期の日々を刻んだ出来事であった。弟子たちにとって、それらはまず大きな希望、次に困惑、そしてついに深い失望を意味した。

多くのユダヤ人にとって、これらの出来事は、偽りのメシアを自称し、イスラエルの約束されたメシアとして認められようとした者の誤った企ての当然の結果に過ぎず、当時の「正当な」支配者たちによって適切に処理されたに過ぎなかった。イエスだけが起きていることを理解しており、その知識こそが、試練に耐え抜き、天の父が彼に与えた使命を完遂する力をもたらしただのである。

主は軽蔑された

イエスは律法学者やパリサイ人たちに決して好かれていなかった。彼らの中には、イエスの振る舞いや教えに感銘を受けた者もいたが、集団としては、イエスの無私な奉仕が始まった当初から敵対的であり、人々をイエスに敵意を抱かせるためにできることは何でもする機会を決して逃さなかった。しかし、多くの庶民は自ら考えを巡らせていた。彼らは、主が語られた慈愛に満ちた言葉を好み、「この人のように語る者はかつていなかった」と認めたのである。ヨハネ 7:46

ユダヤ人一般大衆にとってさらに説得力があったのは、主が行われた数々の奇跡であった。これらの恵みは、癒やされた盲人の言葉に表れたような推論のプロセスを生み出した。彼は、自分が受けた大きな祝福のすべてを理解しているわけではないとほのめ

かしたが、かつては盲目であったのに、今は見えるようになったことは確かに知っていた。

（ヨハネ9:25）他にも多くの盲人が目が見えるようになり、また、汚れた人が清められ、足の不自由な人が歩けるようになり、悪霊に取りつかれた多くの人が解放され、死んだ人が生き返った。

おそらく彼らのほとんどは、主の教えの多くを理解できなかっただろう。しかし、主が彼らを祝福されたこと、そして彼らの親族や友人もそれを知っていたことは確かであった。それゆえ、イスラエルにはかなりの数の人々がイエスに好意を抱き、律法学者やパリサイ人たちに容易に扇動されてイエスの命を奪おうとする企てに加わることはなかった。

何よりも、主は天の父の摂理的な御手によって守られており、その犠牲が成就すべき時が来るまで、敵が主に対する悪意ある計画を遂行することを防がれていた。

弟子たちの確信

一方、イエスが善を行いながら神の国についての福音を宣べ伝えるうちに、弟子たちは神の計画におけるイエスの立場をますます確信するようになった。イエスが最初に彼らを弟子として招いた時、彼らはイエスを約束のメシアと信じていた。

しかし、弟子たちはイエスの奇跡を目撃し、民衆への説教に耳を傾け、その足元に座って恵み深い言葉の精神と深みをより深く吸収するうちに、確信が結晶していったに違いない。ペテロが主のために死ぬ覚悟を表明したのも当然であった。

しかし弟子たちはまだ聖霊によって生まれ変わった自然の人間であった。ゆえに彼らのメシアであり主である方の御業が、かくも突然に終焉を迎えることへの備えはできていなかった。イエスから示唆されたことさえ、彼らが少なくともある程度予期すべきことを警告するものだったにもかかわらず、ペテロからは「主よ、そんなことは決してあってはなりません」という激しい抗議が飛び出したのである。

（マタイ16:22）この時のイエスのペテロへの返答には、聖霊によって生まれた者だけが理解し評価できる深い意味が込められていた。「自分の命を救おうとする者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者はそれを見つけるであろう」とイエスは言われた。（マタイ16:25）

弟子たちにとって、この言葉はどれほど奇妙に響いたことか！聖霊によって天の父の救いの計画の奥義に

導かれていない者たちにとって、今もなお奇妙に聞こえる。

命を失うことでどうして命を救えるというのか？イエスは地上の命を犠牲として失い、あるいは放棄することでそれを成し遂げられた。復活において、神聖な命をもって報いられたのである。その犠牲は自発的なものだったが、いったんこの犠牲の契約に自発的に入った以上、そこから退くことは永遠の死を意味した。こうしてイエスは、死に至るまで忠実に犠牲を全うすることで自らの命を救われたのである。

犠牲によって命を失うことで、イエスはまたアダムの子孫すべてに救いの機会を提供された。これほど卓越した重要性を持ち、墮落した人間の知恵の道筋とはこれほど異なる神の計画の特徴が、神の民によって記念されるのも当然である！主の死の実践的かつ靈感に満ちた側面は、それ自体が記念すべき出来事の十分な根拠となる。

この点において、主の死は神の愛の原理の実践的現れであり、イエスのように愛に支配されるならば、愛が私たちの生活においてなすべきこと、そして必ずなすことを示す実例である。私たちが主のようになるならば、主が他者のために命を捨てるように促したのと同じ愛に動機づけられて、私たちもまた命を捨てなければならない。しかし、人類の身代金主としての主の死が持つ、より重要な身代金の側面を決して見失ってはならない。

王として称えられる

その後、聖霊がペンテコステに待ち望む弟子たちの上に臨んだ時、彼らはそれまで全く理解できなかったこれらの事柄を理解した。しかし、主が語られた全てを理解していなかったにもかかわらず、彼らは主に従い続けた。主の指示に従い、主の友人の一人に連絡を取って若いろばを手配し、イエスはそのろばに乗って、イスラエルの王としてエルサレムの都に凱旋したのである。

弟子たちはイエスをイスラエルの王と信じており、適切な時期にそのような自己顕示が必ず必要になると考えていた。主の死についての言葉が彼らの心に

抱かせた疑問は、少なくとも一時的に忘れ去られるだろう。これこそが本来あるべき姿だった。

イエスは王であり、民がそれを知り、彼を王として称える機会を得る時が来たのだ。今、彼はその機会を与え、民はそれに応えていた。弟子たちは、メシアの王国が今まさに到来したと確信したに違いない！

その後、イエスは神殿へ赴き、そこで出会った病人を癒し、両替商を追い出した。これは都への王としての入城と見事に調和していた。

弟子たちの氣勢はさらに高まった。彼らは神殿を築いた美しい石にイエスの注意を促すことで、

な熱意を示した。彼らはまもなくイスラエルの新支配者がこの壮麗な建造物を掌握する光景を想像したかもしれない。しかしその熱意は、イエスによってたちまち冷やされた。彼はこう告げたのだ——

やがてその時が来れば、あの栄光ある神殿で石が一つも残らず崩れ落ちるだろうと。マタイによる福音書24:2

なんと衝撃的な言葉だったことか！しかし明らかに、この言葉は弟子たちに、自分たちのメシアとメシアの王国に関する計画について、まだ学ぶべきことが多くあると気づかせた。なぜなら後に、彼らはオリブ山でイエスと共にいて、彼の再臨と再臨の証拠、そして彼の王国の確立について尋ねているからである。

彼らは自らの問いが真に何を意味するのか明確には理解していなかったが、少なくともある程度は、イ

エスの言葉から、王国が彼らが思っていたほど近くないと感じ取っていた。彼らは今、以前イエスが語った他のこと、例えば、遠い国へ行って王国を受け、その後戻ってくる貴族のたとえ話を思い出したのかもしれない。いずれにせよ、彼らは自分がほとんど何も知らないと感じたことについて、もっと知りたがっていた。

そこで彼らはイエスに言った。「教えてください。これらのことはいつ起こるのですか。また、あなたが来られること〔ギリシャ語「パロシア」—「臨在」〕と、世の終わり〔ギリシャ語「アイオン」—「時代」〕のしるしは何ですか」（マタイ24:3）。これらの問いから明らかなように、弟子たちは少なくとも漠然と、イエスがしばらくの間彼らから離れ、後に王国を確立するために戻って来られるかもしれないと感じていた。

主が彼らの問いに与えた長い答えは、時代の終わりに関するだけでなく、ユダヤ国家の崩壊から始まる時代全体の一般的な状況についても、驚くべき預言である。

しかし、この預言が弟子たちを啓発し、彼らと主の直面する出来事への備えとなったとは考えにくい。彼らが知りたがらなかったり学ぼうとしなかったわけではない。単に、自然の人間は神の御霊の事柄を理解できないという事実によるのである。コリント人への第一の手紙2:10-14

上の部屋

弟子たちの心は今や大きく動揺していた。過越の食事のためにあらかじめ用意されていた上階の部屋に集まった時、まるで空気そのものが差し迫った悲劇の予感に満ちているかのようにであった。イエスは、彼らの一人が自分を裏切ろうとしていることを明らかにされた。すると

、哀れみと懇願に満ちた問いが上がった。「主よ、私でしょうか？」

（マタイ26:25）。この場面に師の崇高な品格が表れている。イエスは当然ユダが裏切り者だと知っていたが、彼を激しく非難せず、なお「友よ」〔ギリシャ語で「同志」〕と呼びかけた。マタイ26:50

弟子たちは、主の真の精神と視点について学ぶべきことが多かった。彼らの視点は完全に人間的なものであり、主に自己利益に偏っていた。彼らは、イエスの王国で主と共にいる時に自分たちが得る栄光を思うことに喜びを見出していた。彼らはその上の部屋でこのことを考えており、誰が最も偉大かについて互いに言い争っていた。

この出来事は、イエスにさらなる謙遜と奉仕への深い情熱を示す機会を与えた。彼は弟子たちの足を洗い、彼らの中で最も偉大な者とは、すべての者の僕となる者だと説明した。

次に、剣の所持に関する奇妙な質問があった。イエスは弟子たちが何本の剣を持っているか知りたがった。一行に二本の剣があると確認すると、イエスは「それで十分だ」と説明した（ルカ22:38）。おそ

らくこの質問は、当時のイエスの弟子たちにとっては、現代の私たちほど奇妙に思えなかったのだろう。

私たちは彼を平和の君、平和主義者として考えるように教えられてきた。確かに彼はそうであった。後になって明らかになったように、彼はその剣が自身の防衛に使われることを許さなかったのだ。

ではなぜ、弟子たちに剣の所持について尋ねたのか。今となっては、彼が逮捕への非抵抗を示す計画を練っていたことがわかる。ペテロはその二本の剣のうち一本を所持し、後に主の逮捕を阻止しようとしてそれを使おうとした。これはイエスにとって、自ら進んで十字架にかけられることを証明する絶好の機会となった。

それだけでなく、ペテロが軽率な剣の使い方で切り落とした大祭司の僕（しもべ）の耳を癒すことで、イエスは自ら全人類のために苦しみ死にようとしているにもかかわらず、自分のために誰にも苦しんでほしくないという意味を示したのである。

パンと杯

イエスと弟子たちは、イスラエルの最初の月ニサンの十四日、過越の食事をするために上階の部屋にいた。これはエジプトで起きたあの記念すべき夜の年次記念であった。最初の過越の小羊の血が家の鴨居と門柱に塗られ、イスラエル人が安全に過越の食事をする間、エジプトの初子が死んだ夜である。出エジプト記12:1-14

神は民に、最初の過越祭と結びついた大いなる救いを記憶させたいと願われた。そこでイスラエル人に命じられたのだ（

）、毎年これを記念せよと。しかしイスラエルへの教訓以上に重要なのは、あの過越の小羊が指し示していたのは、世界の罪を取り除く「神の小羊」というはるかに重大な犠牲であったことだ（ヨハネ1:29）。

イエスこそがその小羊であり、弟子たちと共に、ご自身がその現実となるべき典型的な過越の小羊の犠牲を、最後にもう一度記念された。

過越の祭りが終わる頃、イエスは弟子たちのために新たな儀式を定められた。パンは砕かれた御自身の体を、ぶどうの実は流された御自身の血を表すと説明された。そして弟子たちにそれらを分かち合うよう求め、これを続けることで御自身の死を証しすると説かれた。（コリント人への手紙第一 11:23-26）主が定められたこの儀式は簡素なものでした——杯を飲み、種入れぬパンを裂いて共に食すだけでした。これは過越の晚餐を新たな形で継続するものではなく、真の過越の小羊、すなわち世界の救い主イエス・キリストの犠牲を記念する儀式として意図されたのです。

当時の弟子たちが、イエスがパンと杯について語ったことの多くを理解していたかどうかは疑わしい。彼らは、自分たちが命を得て、イエスと共に天で支配する特権を享受するためには、イエスが死ぬ必要があったことを当時は悟っていなかった。また、全

人類を墓へと追いやる死刑宣告を無効にする方法が見出されなければ、神の約束された祝福をもたらすには、イエスの王国ははるかに及ばないことも理解していなかった。

さらに彼らは、もしキリストと共に生き、支配するならば、彼ら自身もキリストと共に苦しみ、死ぬ必要があるという事実を全く知らなかった。しかし、パンとぶどう酒は、キリストの真の従者たちすべてに与えられるさらなる特権を表していた。

私たちは、彼の砕かれた体と流された血によって与えられる命の祝福を受け、また彼の犠牲と奉仕の足跡をたどる特権にも与るのです。なんと祝福された交わり、いや交わりが私たちのものでありましょうか。コリント人への第一の手紙10:16,17

彼らは賛美歌を歌い、出て行った

この記述は、イエスがご自身の死を記念する儀式を定められた後、弟子たちがすぐに上階の部屋を出てゲッセマネへ向かったことを示している。主の心は満ちあふれ、弟子たちは疲れ果てていたため、さらに話し合う余裕はなかった。

町をゆっくりと出て園へ向かう途中、幾ばくかの会話が合った。その時ペテロは、たとえ他の者たちが皆自分を捨て去ろうとも、主のために死ぬ覚悟があると宣言した。そしてペテロは、後に自らの人生で示すように、この決意を心から抱いていたのである。

ゲッセマネの園に入ると、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネを呼び寄せ、共に退いて見張るよう招いた

。彼らなら共に祈れると思ったが、彼らはできなかつた。イエスはさらに奥へ退き、祈りを深めた。「もし可能ならば、この杯をわたしから取り去ってください」と父なる神に嘆願した。「しかし、わたしの思いではなく、あなたの御心が行われますように」

（マタイ26:39）イエスが犠牲の契約を破ろうと一瞬でも考えたと考えるべきではない。父なる神の御心は自らの死にあることを知り、その御心を成し遂げる決意を固めていたのだ。

おそらく主は、この時まで、自らの死がこれほど不名誉な形で遂げられ、冒涇と反逆の罪で告発されることを完全に理解していなかったのだろう。

善のみを行い、その思いと言葉と行いのすべてにおいて天の父を敬ってきた者にとって、これらは胸が張り裂けるような告発であった。世界の贖い主として死ぬことは喜んで受け入れたが、父の御心は、このような他の苦しみも受けることだったのだろうか？ そうであった。そしてそれを確信したイエスは、静かで満足していた。

イエスは心配し、その献身のために聞き入れられたと記されている（ヘブル5:7）。彼が死を恐れたと考えるべきではない。しかし、主が父との犠牲の契約を結んだ時、自らの存在そのものを危険に晒したことを

心に留めるべきである（詩篇50:5）。もし彼が忠実でなかったなら、復活はなかっただろう。

したがって、主が懸念されたのは永遠の死であり、

このゆえに、父なる神が今もなお御心に適っていると確信されたことで慰められたに違いない（マタイ3:17、ヨハネ12:27,32）。この確信に祝福されたイエスは、その後、不当にもたらされたあらゆる辱めと恥をすべて受け入れた。

人間の助けという点では、主は地上での最期の数時間にほとんど助けを得られなかった。弟子たちが無関心だったからではない。ペテロ、ヤコブ、ヨハネは最も身近にいたように見え、ペテロは確かに助ける意思を示した。

しかし、この世的な考えを持つ者たちは、師が経験している試練を理解し、その中に入り込むことは全くできなかった。しかし、肉の腕が及ばないところでは、天の父が支え、慰めを与えられた。イエスは、御父が常に近くにおられ、助けようとしておられることを確信していたため、ペテロにこう言われた。「もし望むなら、十二の天使の軍団を遣わして守らせることができる。その願いは聞き入れられるだろう。」マタイ26:53

神の子

ゲッセマネを後にしたイエスと弟子たちは、都から出てきて彼を捕らえようとする群衆と出会った。彼は王の中の王となるべき方であった。主は自ら進んで身を委ね、群衆の指導者たちに「あなたがたが捜しているのは私だ」と告げられた。

ユダの裏切りの口づけ、敵から師を救おうとするペテロの勇敢だが軽率な試みがあり、その後イエスは

急いで裁判所に連行され、大祭司の尋問を受けることとなった。

大祭司カイアファはイエスに尋ねた。「あなたは、祝福された方の子、キリストか」（マタイ26:57,63；マルコ14:61）。イエスは答えた。「あなたが言った通りだ」。この答えが大祭司の目に死罪に値すると見なされることを知っていたからである（マタイ26:64）。

主の宣教の初めから、主は神の子であるかどうかという問題で試みられた。サタンは言った。「もしあなたが神の子なら、神殿の頂上から身を投げなさい」（マタイ4:5,6）。

イエスは自分が神の子であることを知っていた。サタンが示唆するような派手な実証によって取り除かれるべき疑問など、彼には存在しなかった。洗礼を受けた時、神の声が「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と告げたことで、神の子としての確信を与えられたのである。（マタイ3:17）

大祭司が主の地上での奉仕の最後の夜に再びこの問いを投げかける数ヶ月前、主は変容の山で同様の御子としての確証を受けていた。そこでもまた、心を励ます言葉が響いた。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。彼に聞き従え」（マタイ17:5）。

（マタイ17:5）天の父は、ご自分の民を試練に備えさせる驚くべき方法をお持ちである。後に、イエスが神の子であるかどうかを問いただす、嫉妬深く偏

見に満ちた大祭司の前に立たされた時、この新たな確信がどれほどの不屈の精神を与えたことか。

イエスの心には御子としての立場に疑いはなく、結果がどうなるかを知りつつ、真理を断言された。真理のために立ち続けることが死を意味する時、それを貫くのは容易ではない。しかしイエスはそうされ、この点において、私たちがその足跡を歩むべき模範を残された。

王であるイエス

ついに主はピラトの前に引き出された。皇帝の代理人として、ピラトはユダヤ人たちがイエスに対して提起した宗教的告発には関心がなかった。彼らはそれをよく知っていたため、主が王であると主張していると告発した。もしこれが真実なら、ピラトにとってイエスは皇帝の潜在的なライバルを意味し、その理由で死を宣告されねばならなかった。

宗教的偏見は人々を真実から目を背けさせ、他者の美德と罪を正しく評価することを妨げる。

ピラトは師に対して宗教的偏見を持っていなかった。ゆえに審問の結果、彼に対する告発には事実上の根拠がないと判明した。ピラトの見解では、仮にイエスが王であると主張したとしても、それは単なる宗教的概念に過ぎず、現実的にローマの王座を争う存在とはなり得なかった。ピラトは師を釈放しようとしたが、怒りに燃え、偏見に目がくらんだ群衆がそれを許さなかった。

イエスはピラトに対し、ユダヤ人たちが自分王であると主張するのは正しいと認めていた。「このため

に私は生まれ、このために世に来た」——

ローマの代表者から問われた時、彼はそう答えたのである。

（ヨハネ18:37）なんと偉大な王であろうか！彼は三年の半ばという期間、自らの戦いを代行する者たちを募る機会があつたにもかかわらず、軍隊を組織する努力を一切しなかつた。イエスは忠実な僕ペテロでさえ、剣で自分を守ることを許さなかつた。その代わりに、この王の中の王は、自ら進んで未来の臣民のために死を選んだのである。

このような死が記念されるのも当然である！彼らはこの愛の王に茨の冠をかぶせた。唾を吐きかけ嘲笑した。自ら十字架を背負わせ、ついに釘で打ち付けて死なせた。ピラトの

指示により、彼の頭上には「ユダヤ人の王」と記された看板が掲げられた。

（ルカ23:38）ピラトはこの傑出した人物が、ユダヤ人たちに憎まれ、彼らの王として拒絶されたために死んでいることを世に知らしめたかつた。しかしイエスの立場からすれば、彼は世界の救い主として死んでいた。彼にとって死をもたらした状況など取るに足らないものだった。

十字架にかけられている間、傍らに立っていた者たちは叫んだ。「もしお前が神の子なら、十字架から降りてみよ」

（マタイ27:40）。これは三年前以上に遡り、サタンが主に対して投げかけたのと同じ挑戦であつた。当時、主は自分が真に神の子であることを他者に証明するために何かを行うことを拒み、十字架にかけ

られている今も、この誘惑に屈することはなかった。ペテロに剣で自分を守ることを許すのと同じく、これを行う理由など全くなかったのである。

祭司長や律法学者たちは嘲りながら言い合った。「他人を救ったのに、自分を救えないとは」（マタイ27:41,42）。ああ、彼らは全く気づかなかった。主が自らを救うことを拒んだことで、彼らと地上のすべての家族に救いが与えられているという事実を！これが永遠の命を得る者すべてが学ぶべき偉大な教訓である。イエスが私たちに御自身の死を記念するよう求めた理由もここにある。救いの源をこのように思い起こすことは、神の前で謙虚であり続け、自らの必要の全容—すなわち御子の死によって満たされる必要—を悟るために極めて重要なのである。

イエスが罪人の立場を完全に引き受けるためには、天の父が一時的に御恵みを彼から取り去ることが不可欠であった。その時、主は叫ばれた。「わが神、わが神、なぜ私を見捨てられたのですか？」

（マルコ15:34）。しかしついに息を引き取られる時、主は完全な確信をもって「わが霊をあなたの御手に委ねます」と最期の言葉を告げ、地上の御業は死をもって勝利のうちに完結されたのである。（ルカ23:46）

主の弟子として、またキリストの体の一員として、私たちにも犠牲を捧げる特権がある（ローマ12:1）。そして主の死を記念する時、私たちは主の足跡を忠実に追う決意を新たにするのである。

公言するクリスチャンを含む多くの人々は、キリストの苦しみが、弟子たちが「キリストの死の姿に植え付けられる」（ローマ6:5）日々の犠牲の中で続いていることに気づいていません。しかし、これが福音時代における神の計画の働き方でした。

毎年、主の死を記念する日の日没後、世界中の主の民の多くがそれぞれの地域に集い、神の愛の驚くべき賜物、すなわち「世界の創世の初めから屠られたな小羊」イエスを新たに思い起こす。

（黙示録13:8）。同時に、彼らは自らの生涯を新たに捧げ、贖い主の足跡により忠実に従うことを誓い、犠牲と奉仕の特権に喜びを見出し、彼と共に生き、支配するために生きるのです。ローマ6:5,8; 8:17

彼らの救いと私たちの救い

キリストの初臨より千五百年以上も前のニサンの十四日、あのエジプトの夜に起こった悲劇的な事実—

—
エジプトのすべての家の長子が死んだという事実—

—
を伝えるラジオやテレビのネットワークはなく、新聞や電子メディアの見出しにもならなかった。

また、そのような知らせを広めることに何の価値もなかっただろう。なぜなら、その地のすべての家族が自らの悲しみに深く沈み、他者の苦境に思いを巡らす余裕などほとんどなかったからだ。死の天使は人を区別しなかった。何世紀も前のあの夜、ファラオの長子も、この地で最も卑しいエジプト人の長子も、同様に打ち倒されたのである。

これは古い物語だが、神の民にとってその意味は年を追うごとに一層重要となる。我々が注目すべきは、エジプトの長子が死んだという事実そのものではなく、あの運命の夜に地を貫いた滅びの手から、イスラエルの長子が救われたことである。彼らにとってそれは救いの夜だった——

長子が死から救われ、翌日にはイスラエル全体がエジプトの奴隷状態から解放されたのだ。

それゆえ、ニサンの十四日、毎年そうしてきたように、地の果てまで及ぶ主の民は、反型としての「初子の教会」として、救いの希望を特別な方法で思い起こし、その輝かしい新王国の日が明け始める時から、人類の世界が罪と死の奴隷状態から救われるという展望に喜びにあふれます。ヘブル人への手紙12:23

過越の小羊

これが、現在の真理に喜ぶ者たちにとって、主の記念の晩餐の意味を強調する助けとなる背景思想である。私たちは皆、あの最初の過越の夜にイスラエルの長子たちが救われた感動的な物語を覚えている。それは彼らがモーセを通して与えられた神の指示に従ったからであった——過越の小羊の血を流すことを求める指示である。

ヘブライ人の各家族は、その血を家の戸口と鴨居に塗ることで、その血の救いの力に対する信仰を示す必要がありました。これを怠った家族は、エジプト人と共に災いに遭いました。

もちろん、あの象徴的な過越の小羊の血自体に救いの力が内在していたわけではないことは、今や私たちは知っています。むしろ主は、御自身の愛する御子という賜物を通しての救いの驚くべき備えを、単に例示しておられたのです。この考えを心に留めながら、洗礼者ヨハネがイエスについて語った言葉はなんと胸を打つことでしょう。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と。

（ヨハネ1:29）。死の刺し傷はエデンの園で人類を蝕み始め、この災いを除去する唯一の道は血の流されることでした——

子羊の血でも、雄牛や山羊の血でもなく、父なるアダムが失った命の完全な身代わりとなられたイエスの尊い血によってです。ヘブル9:11,12

主の記念

ヨハネがイエスを「神の小羊」と認めてから三年余り、イエスは人々のために命を捨てながら働き、仕え続けた。そして今、その犠牲が成就する時が来た。真の過越の小羊として屠られる時が来たのだ。この犠牲こそが、教会と世界の両方に救いをもたらすために必要だった。

そこでイエスは弟子たちと「上の部屋」で会う手配をし、そこで彼らと共に、エジプトでの最初の過越の夜の出来事を記念する年次祭「

」の食事を、最後となるその夜に共にしたのである。マタイによる福音書26:17-20

これを終えると、イエスはパンとぶどうの果実を取り、新しい儀式を定められた。これは弟子たちに命

じられた二つの儀式のうちの一つであり、もう一つは水による洗礼であるが、どちらも単なる象徴に過ぎない。イエスは弟子たちにパンを与え、それを分かち合うよう招き、それがご自身の体を表すものだと説明された。同様に杯についても、それがご自身の血を表すものであり、その血が彼らのために流されるのだと説明された。マタイによる福音書 26:26-28

これは過越の祭りの新たな形式とする意図ではなかった。イエスとその弟子たちにとって、その夜をもって毎年行われてきた過越の祭りの記念は終わりを告げた。それは単なる型、すなわち影に過ぎず、イエスと彼の血が流されることを指し示していた。今や彼が来て、世の罪のために殺されようとしている以上、過越の儀式を続ける意味はなかった。

イエスが弟子たちに命じたのは、ご自身の死を記念し、その死が弟子たちにとって何を意味し、彼らが「初子たちの教会」としてイエスと分かち合うべきものとは何かを、常に心に留めさせるためであった。

「パン」と「杯」に象徴されるイエスの流された血と砕かれた体を思うとき、私たちがために命を捧げられたこと—その魂を死に至るまで注ぎ出したという祝福の事実を実感させてくれます。このことへの感謝はどれほど深いものでしょうか！

確かに、毎年行われる記念の祝いの時、そして常に心に留めるべき一つの思いは、感謝の心である。神が御子を私たちのために死なせるという愛への感謝

、そして私たちの贖い主として命を捨てられたイエスの忠実さへの感謝である。

贈り物への感謝を示す唯一の方法は、それを受け入れ用いることです。神の賜物に対しても、私たちはそうすべきです。

私たちはイエスを受け入れ、神の計画にかなう形で、その犠牲の命の功績を用いるべきです。記念の象徴に与ることで表されるイエスの完全な受け入れは、私たちの意志を完全に放棄し、御心を行うこと、そして彼を私たちの頭として受け入れることを意味します。そうして私たちは、イエスがそうされたように、私たちも命を犠牲として捧げることを、主が私たちに望んでおられることを学ぶのです。

聖餐

この考えに沿って、使徒パウロは、私たちがパンと杯に与ることは、キリストの犠牲的な働きへの共同の交わりと参加、すなわち聖餐を表していると説明しています。これは私たちを厳粛な思いにさせますが、同時に、主への奉仕に大きな熱意を持って励むよう私たちを奮い立たせるべき考えでもあります。なぜなら、この基盤の上に立ってこそ、私たちは主と共に生き、主と共に支配する特権を得るからです。ローマ人への手紙8:17,18

今年の記念の象徴に与る際には、これらの考えを心に留めましょう。

イスラエルがエジプトで経験したことに予表される、私たちと人類全体のための偉大な救いを思い起こそう。初子階級の一員として血が与える保護を喜び

、また過越の夜に続くあの偉大な日—福音時代—において、イエスと共に全人類を罪と死から救い出すことに与る分にあずかることを喜ぼう。なんと祝福に満ちた展望であろうか！

この救いを得るためにイエスが耐えられた苦しみ—

罪人たちの大きな非難が彼に積み重ねられ、嘲り、鞭打ち、十字架の残酷さ——

を思い起こすとき、私たちの心は、どんな代償を払おうとも彼に忠実であろうという、より確固たる決意で応えるようにしましょう。

聖書が宣言するように、私たちは「石のように」顔を固くして、死に至るまでの犠牲と苦しみの御足跡に従わねばなりません。主が私たちのあらゆる必要の時にお助けくださることを知って。イザヤ書50:7

私たちは皆、毎日を最後の日であるかのように生きるべきです。そうすれば、神の聖徒として、献身の誓いを果たすよう努め、肉とその欲望を犠牲にし、天上のものに心を向けるでしょう。

毎年行われる記念の晩餐が、私たちをこれまで以上に主に近づけ、主の血が私たちにとって、またやがて全人類にとって持つ意味を、より深く感謝する機会となりますように。